傷　痕

二十歳代半ば、私は敗戦の前後、ある雪国の女子師範の教師であった。だから教え子たちは軍国教育と自由主義を短期間のうちに生きた異常体験者である。卒業して三十五年後、クラス会に招かれた。思い出を語ったひとりの言葉。

「卒業時、私たちから人生の指針を求められて、先生は〝この学校で教えられたことの逆をすれば間違いない〟と言われた。私はずっと忘れないで来た」と。

皆はどっと笑い、私も苦笑いでごまかした。しかし、その時の言葉は若気のせいでもなく、本心から出たものであったと今も信じている。

当時の師範学校は、軍隊を除くと日本最強の軍国調二十四時間教育であった。燃料がなくなると、おふろは十日に一回の銭湯行き。彼女らは洗面器を左手に、隊列を組んでゴシンエイに敬礼して軍人のごとく往復した。ふろぐらい三々五々自由に行かすがよいと、私は主張した。もちろん聞かれなかった。しかし、敗戦を境に裏門から勝手に出入りしても、教師たちは黙っていた。私は皮肉った。「隊列を組んで行け。昨

日と今日とで自分の行為を何もかも逆転さすのは恥ずべきだ」。

暖のない教室は零下十度にもなる。だから授業中、私はオーバーを着用させた。他の教師たちは皇道に反するといって脱がせた。

その最も軍国主義的教師が、敗戦後だれよりも先に民主主義に衣替えを始めたから、皆も気安く同調した。皆がすれば変節(へんせつ)も転向(てんこう)も恥ずかしくはない。

では、お前はどうだったか。寒い日だった。朝礼で整列しているある女生徒の手先がだらりと曲がっている。なんということか、私はその手をたたいてしまっていたのである。思いきり。小声で注意すれば足るものを。心の軍国調はこの胸に巣くっていたのだ。五十歩百歩とは全くこのこと。転向の傷痕は我が胸に刻まれ続けねばならない。

（一九八三年三月十日）